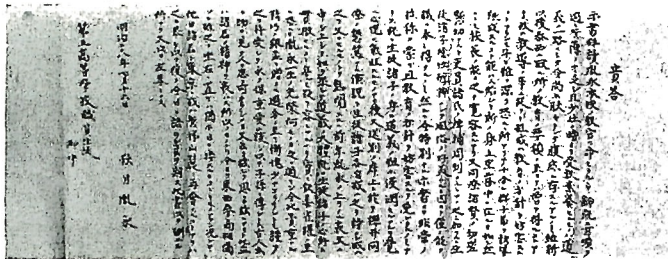


山高水長集と鎮西餘響



秋月草軒翁の禮狀

臨んで、感銘を蒙つた生徒によつて印行を企てられたものであることが、中川校長の序にも見えてゐる。古稀翁の心得躬行に基づくところの講義は、講筵に侍した人々の、今に以て語り草となつて居り、又、當時の龍南會雜誌などにも、屢々見えてゐるところであるが、その校を辭して此地を去るに臨んで、山高水長集や鎮西餘響などを物して、之を翁に贈つてゐることを以てするも、その人格的影響の如何に深甚であつたか、察せられる。而して又、我が五高同窓會が曩に秋月先生特輯號の會報を刊行した所以でもあるのである。

註 下賜ノ勅語ハ御親筆ナルヤ果シテ然ル中ハ職員生徒奉迎スベクニ付御報示ヲ乞フ
(一月八日付平山校長宛電文)

勅語ハ御名丈親筆也奉迎等ノ事ハ郵便ヨリ(一月九日付平山校長ヨリ返電)

生徒

今般教育ニ關スル宸署ノ勅語ヲ奉持シ平山校長不日歸校ニ付右勅語御到着ノ際市外ニ於テ職員生徒一同奉迎致スベク管ニ付同時制服着用校内へ參集スベシ

但時日ハ追テ相示スベシ

右豫メ揭示ス

明治廿四年一月十九日

第五高等中學校

生徒

過日揭示置候 勅語奉迎トシテ明廿三日午前第九時當校へ參集スベシ

右揭示ス

明治廿四年一月廿二日

第五高等中學校

生徒

本日 勅語奉迎トシテ參集之儀揭示置候處已ニ昨夜御到着ニ付テハ本日校内ニ於テ奉拜セシム、ベシ

但奉拜ハ體操教員ノ指揮ニ依ルベシ

右揭示ス

明治廿四年一月廿三日

第五高等中學校

文甲六號 一月廿一日受付第二二號

教育ニ關スル勅語親署ノ分既ニ下附相成候處尙勅語謄本並ニ文部大臣訓示各二葉交付相成候條御受領有之度此段申進候也

明治廿四年一月十六日

文部省總務局長辻新次郎

第五高等中學校校長平山太郎殿

追テ本文謄本並ニ訓示一組ハ貴校醫學部へ交付ノ分ニ有之候右申添候也

謄本並訓示ハ別便差立候也

第五節

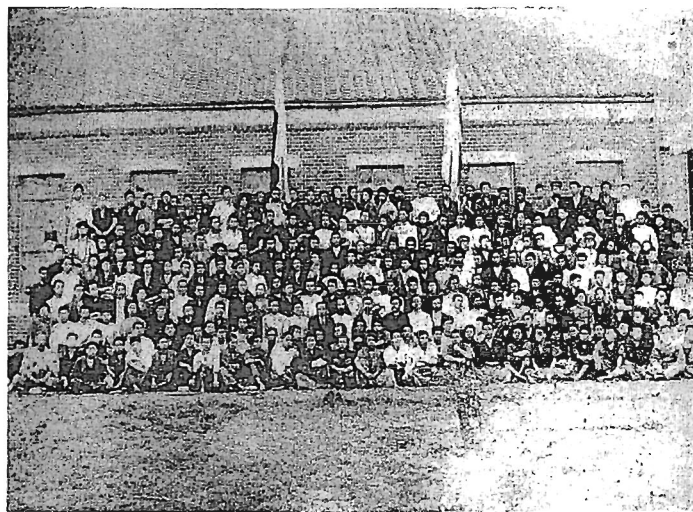
第一回卒業式と送別會、附二十五・六年に於ける本校

第一回卒業式概況

本校創業の際に於て、遠大の抱負を以て豫科第三級に入學した二十四名並に六十一名の假入學者中、學業に、運動に、將龍南會の創立に、不斷の努力を續けること五星霜、茲に首尾よくその業を了へた一部法科生四名・同文科生二名、二部工科生五名、同理科生三名、合計十四名の人々に對する晴れの第一回卒業式は、二十五年七月

第三章 新校建築と其後の第五高等中學校

十日午前九時より、式場たる雨天體操場に於て舉行せられた。その數に於て僅に十四名に過ぎず、到底今日の比でないが、縣知事・師團長までも祝辭を朗讀するなど、送られる人も、送る人も、感慨無量なるものがあつたに相違ない。即ち、此の日門前には大綠門を設け、菊花を以て作れる卒業式の大額を掲げ、表門及び本館玄關事務室（現生徒課、圖書課）等の入口には國旗を交叉し、玄關前には凡そ二百個の球燈を釣し、烟火を揚げて光彩を添へた。午前九時十分、職員生徒及び知事・師團長・貴衆兩議員・縣會常置委員・諸官衙・學校・其他の來賓一同着席するや、嘉納校長先づ學事の情況を報じたる後、順次卒業證書を授與し、次いで一場の告辭を述べ、終つて卒業生總代武藤虎太氏の答辭、教員總代櫻井教授演述・吉田醫學部主事・生徒總代甲斐一之・松平熊本縣知事・茨木陸軍少將の諸氏各々祝辭朗讀あり、次に元本校教諭福井彦次郎氏の演説を以て式を了り、來賓には教員控所及び會議室に於て、職員卒業生には庶務及び會計掛室に於て、



（影撮日一十月七年五十二治明）念記業卒回一第
（生業卒ハ人四十ノ央中列後ノ、授放月秋目人二ヘ左、長校納嘉央中目列三リヨ前）

和やかな立食の宴が設けられたのである。

嘉納校長
の告辭

學校長告辭

本日卒業ノ諸子ニ告ク諸子ハ本校ノ教育ヲ卒リ今正ニ其證書ヲ得タリ夫レ本校ノ教育ハ將來實業ニ就カント欲スルモノ又ハ進ミテ大學ニ入ラント欲スルモノニ必要ナル學識ヲ授ケ且ツ訓練ヲ爲スヲ以テ目的トス然ラハ則今ヤ諸子ハ獨立シテ社會ニ出テ其務ニ從フモ亦大學ニ入り高尚ナル學業ヲ講究スルニモ必要ニシテ關ク可カラサルノ準備ヲ爲シタルモノナリ是レ諸子力數年ノ間刻苦勉強シタルノ結果ニシテ豈諸子ノ爲メ國家ノ爲メニ賀セサル可ケンヤ然リト雖モ是レ全ク人間畢生ノ業務ヲ爲スノ準備タル一階梯ヲ終ヘタルニ過ギサルナリ故ニ社會必用ノ人ト爲ランニハ尙苦學勉勵幾多ノ辛酸ヲ嘗メサル可カラス之ヲ草木ニ譬フレハ恰モ初メ地ニ播キタル種子カ始メテ萌芽ヲ發シタルト一般ニシテ此ヨリ美麗ナル花ヲ開キ良好ナル果實ヲ結ハンニハ日ヲ追ヒ月ヲ逐ヒテ漸ク成長シ其間ニハ尙酷烈ナル寒熱凜冽ナル風霜ノ艱難ヲ經テ然ル後始メテ之ヲ得ベキナリ然ラハ則諸子ハ今ヨリ後益々堅忍不拔ノ氣象ヲ養ヒ能ク學海波濤ノ洶湧ヲ凌ギ潰冒衝突畏ルヘキノ患ヲ前知スルコト大禹ガ洪水ヲ治ムルニ於ルガ如クナラサレハ未タ其結果ヲ見ルコト能ハサル可シ願フニ諸子ノ前途萬里遼遠ナリ前途尙遠シト謂フトキハ或ハ諸子ノ失望ヲ惹クニ似タレトモ大ニ然ラサルモノアリ何トナレハ我國ノ將來ハ諸子幹旋ノ力ヲ要スルノ事業太タ多シ文學ニ理學ニ政治法律ニ殖産興業ニ凡百ノ事總テ諸子ノ出ツルヲ待ツコト大旱ノ雲霓ニ於ルカ如シ而シテ今諸子ハ續キテ大學ニ入り各自志ス所ノ専門ノ學科ヲ研究セント欲スルモノナリ其レ然リ故ニ將來社會ハ諸子ノ勞働ヲ需ムル更ニ一層ノ多キヲ加ヘン然レトモ是レ單ニ大學ノ學科ヲ修メタルニ因ルニアラス他ナシ其修メタル所ノ學科力世ヲ利シ人ヲ益スルノ力ヲ有スルヲ以テナリ然ラハ則社會ノ望ハ諸

子ノ學業上ニアラス即チ諸子カ畢生資ヲ學業ニ取り之ヲ利用シテ以テ大ニ社會ニ與フル所ノ結果ニ在ルナリ此ニ於テ予ハ諸子カ大學ニ在テ修學スルノ間飽クマテ左ノ數項ニ注意シ之ヲ服膺シ須臾モ忘レサランコト希望ニ堪ヘサルナリ

第一 學問研究ノ目的ハ或ハ其眞理ニアリ或ハ其應用ニアリ今我國ノ現狀ヨリ觀察スレバ先ヅ應用ヲ主トシ眞理ノ探討ヲ後ニス可シ然レドモ若シ眞理ノ探討ヲ爲サント欲セバ其眞理ヲ應用スルトキハ世ヲ益スルコト緊要且ツ鴻大ナルモノヲ先ニスベシ

第二 大學ニ於テ修ムル所ノ學業ハ唯自己畢生ノ業務ニ對スルノ準備ニ止マルモノナルヲ忘ル可カラズ故ニ目前ノ名譽等ヲ得ント欲シテ不急ノ事物ニ注目シ或ハ勤勉度ニ過ギテ遂ニ攝生ヲ忽ニスルガ如キコトアル勿レ

第三 大學ニ在ルノ間ハ所謂主一無適ヲ守リ心ヲ他事ニ寄セズ以テ書生ノ活潑ナル精神ヲ養ハザル可カラズ

第四 大學ノ業ヲ卒ルノ日各自職業ヲ撰ブノ時ニ方リ能ク永遠確乎ノ目的ヲ立テ一時ノ名譽待遇等ニ心ヲ移シ

志ヲ轉ズルコト勿レ

諸子ハ我校第一回ノ卒業生タルヲ以テ終リニ臨ミ特ニ一言セサルヲ得サルコトアリ近年九州ニ幾多ノ人材ヲ出シタルコトハ天下ノ尤モ許ス所ナリ抑モ此等ハ皆諸子ノ先輩ニシテ明治ノ世紀ニ於テ勇ヲ奮ヒテ卒先シ榛蕪ヲ剪除シ荒蕪ヲ開拓シ以テ種ヲ播キ苗ヲ生セシメタルモノト謂ハサル可カラス夫レ創業ノ功ハ此等先輩アリテ既ニ之ヲ奏セリ然レトモ此ニ續キテ之ヲ栽培培養シ美果ヲ結ハシムル守成ノ務ヲ謀ルニハ必ス先輩ニ比シテ劣ラサルノ人物ヲ須ツモノナリ而シテ此等ノ人ハ必ス愛國ノ精神ニ富マサル可カラス文明時代ノ學藝ニ通セサル可

カラス人ヲ御シ世ニ處スルノ才幹ヲ有セサル可カラス確固不拔ノ氣象ト忍耐不倦ノ性質ヲ備ヘサル可カラス我校ハ九州ニ於テ最高等ノ學校ニシテ此ノ如キ人物ヲ出サンコトヲ企圖シタリ而シテ今ヤ諸子即チ初回ノ卒業生ヲ出スニ至レリ今後諸子カ大學ニ於テ修學スルノ間又大學ヲ出テ、各自専門ノ業務ヲ執ルノ間天下ノ人必ス諸子カ各自ノ任務ヲ能ク記憶スルヤ否ヤニ注意セシ故ニ諸子ハ先輩ニ比シテ一層困難ナル事業ヲ繼續スルノ覺悟ヲ有セサル可カラス諸子ハ今ヨリ後年々本校ヨリ卒業スル生徒ノ模範タルノ覺悟ヲ有セサル可カラス諸子ノ責任重且大ト謂フヘシ嗚呼諸子其レ之ヲ勉メヨヤ其レ之ヲ勉メヨヤ

明治二十五年七月十日

第五高等中學校長 嘉納 治 五 郎

生徒總代
の祝詞

生徒總代 祝詞

維明治廿五年七月十日我校第一回卒業證書授與式ノ典ヲ舉行セラレ其榮ヲ荷フモノ加藤君以下十有四人本校創立以來茲ニ五星霜諸君志操堅確研磨砥礪以テ本校卒業ノ嚆矢トナリ將ニ大學ニ入ラントス諸君ノ榮何ヲ以テ之ニ加ヘン然レトモ榮大ナル者ハ其任亦重シ思フニ大學ニ入ルノ日十日悉ク諸君ニ集リ十手等シク諸君ヲ指ス蓋シ諸君ノ行爲ヲ視學藝ヲ察シ以テ敢テ我高等中學ノ全班如何ヲ推測スルモノ有ラン嗚呼我校ヲシテ九鼎大呂ヨリ重カラシムルモ諸君ナリ塵芥鴻毛ヨリ輕カラシムルモ諸君ニアリ校長教授諸先生孜孜矻矻勉全力ヲ教職ニ竭サレシ厚意ヲシテ炳然赫奕タラシムルモ諸君ナリ之ヲシテ雲散霧消セシムルモ諸君ニアリ憶フ前年 陛下親シク名教ヲ垂レ獎勵備具至ラザルナク生徒一同感激奮發奮テ洪恩ノ萬一ニ報センコトヲ期ス而シテ一同ノ爲ニ此赤心ヲ表白スルモ諸君ナリ一同ヲシテ

聖恩ヲ解サザルノ小人視セラル、ニ至ラシムルモ諸君ニアリ嗚呼諸君ノ任亦大ナル哉然レドモ九州ノ男子剛直質朴敝衣素食其行クヤ奮然其止ルヤ確然外物ノタメニ其中ヲ攪亂セラレザルハ多ク我九州男子ノ養ヒ得ル所トス以是一旦諸君此地ヲ去テ華美俗ヲナシ輕佻風ヲ爲スノ地ニ至ルモ必ス平素諸君ト共ニ居住スル我九州ノ良俗ト諸君ト共ニ養成サル、我校ノ好慣習トヲ以テ別ニ一社會ヲ開クノミナラス之ヲ鞏固ニシ之ヲ擴充シテ衆生徒ヲシテ則テ我ニ取リ本校ヲシテ赫々タル光輝ヲ發セシムル蓋此行ニ在ルハ固ヨリ疑ヲ容レス豈偉ナラスヤ安ソ踴躍抃舞シテ之ヲ賀セサルヲ得ンヤ聊蕪辭ヲ艸シテ謹テ祝意ヲ表ス

明治二十五年七月十日

第五高等中學校生徒總代 甲 斐 一 之

醫學部主事祝詞

吉田醫學
部主事の
祝詞

本日第五高等中學校本科生徒諸子ハ定期ノ試験ヲ經テ茲ニ卒業證書ヲ授與セラレタリ不肖健康職ヲ醫學部主事ニ承クルヲ以テ卒業生諸子ノタメ一言以テ祝セサルヲ得サルナリ

第五高等中學校ハ明治十九年勅令第十五號ニ基キ設置セラレタルモノニシテ卒業生諸子ハ本校創立ヨリ今日ニ至ル幾多ノ星霜ヲ經テ其學ヲ所智德修養ノ完成ヲ期シ今ヤ諸子ハ多年勤學ノ効空シカラズシテ此卒業證書ヲ受ケラル、ニ至リシハ實ニ諸子ノ名譽大ナリト謂ツヘシ又諸子ノ今日マテ學ヒ來ル所ノ能力ハ即チ國家ノ光華ナリ然リ而テ諸子ハ之ヨリ益ス進ンテ大學ニ入り益ス學理ノ蘊奧ヲ極メテ以テ其實ヲ結ビ大ニ國家有力ノ士トナリ其盡ス處ナカルベカラス故ニ諸子ノ前途尙遠遠ニシテ又諸子ノ責任ノ大ナルコトハ諸子ノ自ラ信スル所ナリ

諸子猶百折不撓ノ精神ヲ涵養シ倍ス進ンテ已マス益ス健康ニシテ益ス勉勵シ益ス氣節ヲ尚ヒ益ス德義ヲ重シ

以テ國家ノ隆盛ト福祉トヲ將來ニ期シ其自ラ信スル處ノモノニ負カサランコトヲ希望ニ堪サル所ナリ

聊カ所思ヲ陳テ祝詞ニ代フト云爾

明治二十五年七月十日

第五高等中學校教授醫學部主事 從六位 吉 田 健 康

櫻井教授演述・松平知事竝に茨木少將の祝辭(省略)

卒業生送
別會概况

是より先、生徒間に於ては、七月七日をトして、卒業生送別會を催してその前途を祝福してゐる。今、雜誌第九號(明治廿五年九月廿日發行)の記事を掲げて見れば、

(前略)乃ち相謀り七月五日席を忘吾會舎に設け送別の會を張る會するもの總て三百餘人門前には旭旗を交叉し以て光景を壯にし樓上樓下及び庭園に至る迄蕭洒清麗以て會場を優にし幹旋甚だ周到なり樓下の廣室を以て式場に當て樓上を以て宴席となす午後三時に至り用意全く調ひ會員已に集まる乃ち林市藏氏先づ起ちて開會の辭を述べ古森幹枝氏次で祝文を朗讀し野口彌三氏祝辭を演ず其他大塚末雄氏堀貞江口俊博澁谷爲太郎吉田豐水月仲丸和木貞藤島國廣朝山景秀吉川久太郎諸氏或は文を読み或は詩歌を吟じ或は辭を演じ以て其行を祝し以て其前途を戒め皆衷情より之を發露せり(中略)三百の聽衆沈黙敬聽倦怠の色なく其佳處に遇へば喝采の聲殆ど天地に震へり最後に藤本充安氏は卒業生總代として答辭を述べ祝詞演說此に全く盡き乃ち抽籤を以て位次を定め席を樓上に移す席全く定まり酒を飲み肴を食ひ以て快を取る宴已に酣に耳漸やく熱する比ひ忽ち正面の高席に當り嘈々切々絃を撥ふ聲を聞く即ち東嶋某の薩摩琵琶なり(中略)絃聲已に止んで日漸やく暮る此に於て漸次

歸途に就く尙ほ平素私交を卒業生諸君に有するもの數十人團欒坐に残り相酌んで舊を話し幾多の健兒は秋水を提げ詩に和して舞ひ慷慨悲壯夜漸やく深きに至りて歸る此日美酒の酔ふべき佳肴の飽くべきなきも誰か訣別の情に酔ひ衷心の熱血に飽かざりしものぞ

尙この送別會の席上に於ける藤本充安氏の答辭は、當年の青年の意氣を示すものであると考へるので、茲に節録して置く。

(前略)吾人は他の刺激によりて興奮せるにあらず只吾人が赤誠よりして無形の第五高等中學を建設したりき即ち本校を以て單に監督者のみの學校とは見做さざりしなり吾人が明治廿年始めて本校に入るや本校は一小破屋の内にありて現今の如き宏壯美麗なる煉瓦の校舎の如きは夢にだも見ることも能はざりき假令學校は此の如く汚穢狹隘なりしにもせよ吾人は確かに精神を有うたりしなり(中略)現今域に及ぶ迄經歷せる重なる事項を擧ぐれば

(一)學團の編成(二)體育會の創設(三)福井先生の離別(四)飯田舎監の訣別(五)土曜會の開設(六)開校式に於ける醫學部との親交會(七)招魂祭への寄附(八)擊劍會及柔術會の設置(九)自炊制度(十)龍南會の開會

(中略)吾人若し監理者によりて此等の事業を完ふするを得たりとせば監理者の變化は一々影響を吾人に及ぼすべき筈なり然るに實際之が變化を見たることなきより見れば固より生徒一己の力なりしや知るべし(下略)

而して二十四年五月には、官報・九州日日新聞・熊本新聞・九州自由新聞・福岡日日新聞・鎮西日報・長崎新報・大分新聞・宮崎新報・日州新報・鹿兒島新聞・佐賀新聞・福陵新報等に、本科、豫科、同補充生募集の廣告を

二十五年
十月末の
職員生徒
數

なし、八月二十五日を以て出願締切とし、九月一日より試験を開始したのであるが、翌二十五年九月一日、午前七時より九時まで算術、九時より正午まで英文和譯を課して、第一次入學試験を行ひ、四日成績を揭示し、五日より各年級の第二次試験を行ひ、十月十日には、開校記念式を催し、勅語奉讀、學校長・秋月教授・生徒代表の各祝詞、記念式の唱歌等を以て了り、後龍南會主催としては、戶外遊戲・擊劍・弓術等があり、今後十月十日(醫學部は四月十日)を以て記念日と定めた。かくて同年十月三十一日調の職員は、嘉納校長、吉田醫學部主事の外、教授二十四人、助教授十人、書記六人、囑託七人、雇員十三人、雇外國教師一人(ラフカヂラ・ヘルン)、合計六十二人。(教授中には吉田氏を含む)内、(醫學)博士一人(大谷周庵)、學士十五人で、生徒は、本校部に於ては、本科一部第二級(法科)二十一人、同一部第二級(文科)八人、同一部第一級(法科)二十人、同一部第一級(文科)八人、同二部第二級(工科)七人、同二部第二級(理科)三人、同二部第一級甲乙七人、豫科第一級甲乙二組八十三人、同第二級甲乙二組五十九人、同第三級甲乙二組六十二人、補充第一級甲乙丙三組百八人、同第二級四十五人、合計十七組四百四十一人で、更に之を府縣別數字順にして、同年九月末日調に従へば、熊本百六十五人、福岡九十九人、佐賀五十一人、長崎四十七人、大分三十一人、鹿兒島十六人、宮崎六人、石川四人、東京・兵庫各三人、大阪・福島各二人、京都・山梨・静岡・山形・秋田・廣島・山口・愛媛・高知・青森・滋賀・福井各一人となつてゐる。又、醫學部に於ては、醫學科級外生九十八人、同第四年級三十二人、同第三年級五十人、同第二年級七十四人、同第一年級百一十一人、藥學科第三年級九人、同第二年級三人、同第一年級六人合計三百八十三人で、府縣別數字順にすれば、長崎百七人、福岡六十五人、熊本五十七人、佐賀五

十六人、大分二十一人、宮崎十人、山口九人、高知四人、鳥取三人、兵庫・廣島各二人、沖繩・千葉・滋賀・奈

良・島根・岡山・愛媛・香川各一人となつてゐる。

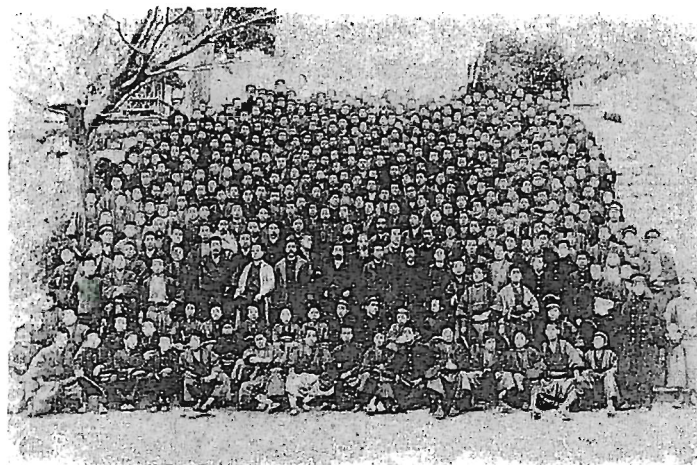
尙、二十五年に於ける事柄を記せば、三月七日の醫學部開校式
五月六日の招魂祭武裝參列、六月八日花岡山に於ける平山前校
長一年祭等の外、生徒募集に際しては、豫科補充二級を止めたこ
と等であり、二十六年に於ては、七月十一日第二回卒業式の際、
能久親王殿下の台臨を辱うし、左の如き令旨を賜はつたこと、
同年シカゴ府に於けるコロンブス世界博覽會へ、本校建築圖を
出陳したこと（醫學部よりは、妊娠後四週間の人胎一、肝臟デス
トマ蟲卵五其他である）、職員員の服制を定めたこと等である。

能久親王殿下令旨（七月二十日官報謹載）

夫レ國家ノ隆昌ヲ致シ人々ノ福祉を進ムルハ則チ教育ノ力ニ
淵源セサル可ラス而シテ本校職員ノ啓沃提撕ト諸子各自ノ憤
悱研鑽トニ由テ諸子ハ已ニ高等普通教育ヲ終了シタル者ナリ
茲ニ本日卒業ノ式ヲ舉ク余亦喜フ所ナリ嗚呼諸子ノ行路未タ

其半ニタモ達セス今日以往夙夜踴勉尙進ンテ彼ノ聖詔ノ旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期スヘシ諸子其レ旃ヲ勉メヨ

能久親王
殿下の令旨



加藤社に於ける嘉納校長送別記念

